先進校に学ぶキャリア教育の実践　CASE 1

千葉・市立 **松戸高校**（まつどこうこう）

教師が無理なく続けられる生徒主体の「進路学習」

取材・文／永井ミカ　撮影／福田依子

≫実践ノウハウ

- つけたい「力」を明確にし、学習の目的を常に意識
- すべての活動で「振り返り」を必須に
- 毎年度進路指導部は総括として冊子を発行

千葉県には松戸高校が2校あり、こちらは市立のほうである。ほとんどの生徒が松戸市在住で、卒業後の進路は、およそ半分が大学・短大進学、残り半分が専門学校進学や就職の道を選ぶ。同校はいわゆる中位進学校であるが、ここ数年、生徒たちは「入れるから」という理由で進学先を選ぶ傾向があった。一方、就職の状況は厳しくなり、挑戦することをあきらめフリーターとして卒業する生徒もいた。

そこで、2006年より、進路指導部と学年団とが協力。これまで学年ごとに横割りだった進路指導に縦のつながりをもたせることにした。現在は、生徒が主体的に進路選択できる力を養うことを目的にキャリア教育のプログラムを開発しながら実践を試みている。

主体的な進路選択を目指した3年間の教育プログラム

同校のキャリア教育は、05年に同校に赴任した進路指導部長の椿仁三千先生が中心となって構築している。もともとは椿先生が01年から前任校（千葉県立流山中央高校）で実践していたものをベースに06年からスタートしたものだ。

3年間の流れは図1のとおり。特に進路の時間が決まっているのではなく、総合的な学習の時間やLHR、また長期休暇中を利用して、人物調査、人生講話、社会人インタビュー（主に保護者）、職業調査、模擬講義などを行っている。キャリア教育の基本である「自己理解」はじっと自分の内面を見つめても湧き出てくるものではなく、人に話を聞いたり調べたりすることによって可能になると考え、学習内容を決めている。

そして、そういった取り組みの際には必ず感想などをワークシートに残し、個別のポートフォリオで管理。キャリア教育を進めていくうえで〝振り返り〟を必須のプロセスとしている。進学、就職後のマネープラン作成も、生徒が自分で調べてシミュレーションしワークシートに書き込む方法で実施。これらのワークシート類の多くは、学校HP上で公開されている。

なお、同校のキャリア教育のコンセプトは「キャリア発達学習」であり、表現はあくまでも「進路学習」。生徒が主役なのだから、生徒を主語にするべきという考えからだ。実際に、生徒同士で成果物の評価をしあったり、教員の同席なしでディスカッションをさせるなど、生徒が自主的に動ける工夫を取り入れている。また、いいと思ったことは数人の生徒からでもすぐに始めてみる、むやみに教員の負担を増やさない工夫をするというのも特徴だ。

取り組みを始めてから、挑戦をあきらめがちで受け身だった進路選択に変化があらわれている。2学年ぐらいから進路について真剣に悩む生徒が増えた。それに伴い、大学選択の幅が広がり、一般入試を受ける生徒も増加。就職も不景気の中にあっては順調で、進路未定者は減少している。

>>School Data
普通科・国際人文科／1975年創立
生徒数／1084人（男子543人・女子541人）
進路状況（2008年度実績）／大学・短大 51%
専門学校 18%・就職 5%・浪人・その他 26%
千葉県松戸市紙敷2-7-5
TEL 047-385-3201
URL http://www.matsudo.ed.jp/~ichimatsu-h/

Process 立ち上げのプロセス

今問題がなくても主体性を育む進路学習は必要

中位進学校である松戸高校には、中学校の成績がちょうど中間ぐらいの生徒が入学し、授業態度はまじめ、部活動や行事にも楽しんで参加する。以前から特に問題となるような事柄はなかった。

05年に椿先生が赴任してきたときも、学校の印象はよかった。一方で、進路実績にはどこか物足りなさを感じたという。「地元の大学に行く生徒が多く、県外に出てみようという生徒や一般入試を受ける生徒が少ない。まじめだけれど生活力に乏しい。そんな生徒たちの枠を外してみたいと思いました」

3学年の副担任として赴任1年目を終えたとき、椿先生は卒業年度の進路に関する総括を提出。指定校に進学する生徒の多さや、受験しやすい学部が人気であることなど、生徒たちの受け身な進路選択などについて分析・指摘し、進路学習の必要性を訴えた。「大切なのは自分で進路選択をすること。そのための進路学習は、どんなレベルの学校、どんな状況の学校にも必要です。また本来なら、夢は叶ったあとが大変。将来、何かあったときにも対処できる生活力も身につけてもらいたいですから」

前任校での取り組みを松戸高校でも導入

2年目、進路指導部長となった椿先生は、前任校で効果があった進路学習を、松戸高校でも取り入れることにした。場所も近く、生徒のレベルや学校の雰囲気も似ていたので、取り組み内容に大きな手直しは必要なかった。反対意見は覚悟していたが、考えていたより容易に受け入れられたそうだ。

ちなみに、椿先生の前任校がキャリア教育を導入したのは、大学全入時代への危機感からだ。当時、その高校では短大進学者が多かったため、四大進学者を増加させようとしていた。ところが、大学全入時代を目前にあっさりと四大進学者が増えた。つまり、生徒たちは深く考えず、「行けるから行く」という選択をしたのだ。そのことに学校は危機感を感じ、主体的な進路選択を目指してキャリア教育を導入した。そんな静かな危機感は松戸高校でも同じだったのかもしれない。椿先生は、取り組みをスタートさせるにあたって、「松戸高校の先生方も、進路に関する新しい取り組みを欲していた気がした」という。

図1 3年間の進路学習計画

	1学年	2学年	3学年
テーマ	自己を知り、夢を見つける	社会を知り、夢を検討する	進路開拓、情報収集、実行
目標	自己理解	社会理解	進路実現
1学期	●将来の夢を考える ●今までを振り返り、未来の自分をイメージする中で、高校3年間の生活目標を設定する 「進路ファイル」 ポートフォリオ作成 人物調査など	●自分の興味ある進路分野の社会的意義を知る ●上級学校の種類と内容を調べ、進路志望について検討する 分野別調査、職業調査など	●進路実現のための具体的情報を集める ●保護者ともよく相談し、現実検討する 保護者説明、3者面談、分野別説明など
2学期	●自分について総合理解 ●自分の進路について考える ●上級学校の種類と内容について検討する 人生講話など	●職業研究し、各分野の資料をまとめる ●自分の適性と実力を測り進路実現に向けて計画を立てる 分野別説明など	●社会の構造や学問、職業のはたす役割を理解する ●夢を目指して主体的に取り組む 入社試験、入学試験
3学期	●さまざまな生き方を学ぶ。自分の生き方を考える ●自分の可能性を伸ばすものを調べる わくわくインタビュー 職業別ガイダンスなど	●職業のやりがい、大切さを理解する ●実際の進路を具体的にシミュレートする。 模擬講義、バーチャル大学生など	●日々の生活を有意義に過ごす ●夢に向かってあきらめず取り組む ●自分の総合力を高める 一般入試など

進路指導部長・キャリアカウンセラー
椿 仁三千先生

Close up ① 体制づくり

コンセプトを明確にし学年団が決定・実行する

同校の進路学習のコンセプトは「主体的な進路選択」。進路指導部では常にこのことを意識し、情報発信をしている。「何のためにこの学習をやっているのか。それがわからなくなると、ただプログラムをこなすだけになってしまいます」と椿先生。最終的に生徒につけてもらいたい力は、図2のDの部分(自律型探求力)。そのためにA、B、Cの学習プログラムを実践するとし、各プログラムがA、B、Cのいずれに対応するかを明記したシラバスを作成。「進路ノート」などで教員や生徒に示している。

コンセプトに添ったプログラムを提案するのは10人からなる進路指導部。それを導入するかどうか決定し、実行に移すのは学年団だ。進路指導部では、実行の際、なるべく担任の教員に負担のかからない方法を工夫している。

例えば1学年の夏期休暇の課題である「人物調査」は、自分の興味のある人物(著名人や歴史上の人物など)について調査しワークシートにレポートを書くプログラム。2学期には、各クラスの生徒から選ばれた進路委員がクラスの中のベスト10を選び、名前は消して廊下に張り出す。作業は生徒が行うから担任の負担は軽い。もちろん、こうすることで書いたり調べたりする進路学習だけでなく、情報共有ができるし、生徒同士が刺激しあい楽しむことができるというメリットがある。あくまでも「やりっぱなしにしない」ということが必須だ。

そのほか、比較的容易に作業ができるワークシートを進路指導部が作り、総合的な学習の時間やLHRの時間にやってもらえるよう担任に配ることも多い。内容は、自己分析をしたり、10年後の自分を考えたり、大学生活や社会人生活をシミュレーションしたりといったもの。生徒が記入したワークシートは、1・2学年の担任はポートフォリオで管理する。こうすることで生徒理解が深まるし、次の担任への引き継ぎも容易だ。そして、3学年になったら生徒自身が管理をし、進路関係の重要書類を整理したり、進路決定時に自己を振り返るのに使う。

「市松キャンバス」のネーミングで横のつながりを強化

同校の取り組みは「市松キャンバス」とネーミングされている。市松とは市立松戸の略、キャンバスはこれから何かを描いていくであろう白いキャンバスをイメージした。「進路だけの取り組みではなく、教科や生徒指導などと連携していきたい。名前があると横のつながりが持ちやすいんです」と椿先生。市松キャンバスという冠のもとに、ゆるやかなプログラムを組み、常に風通しをよくしておく。いいと思ったものは、まず少数の生徒から気軽に取り入れ、効果が感じられないものはやめる勇気をもつ。「教育現場では3年ぐらいで頓挫するシステムが多く、それを避けるにはマイナーチェンジと振り返りが必要。そして主役は生徒だということを常に意識して、〝生徒のキャリア発達にとっていいかどうか〟を考えることです。スピリットを変えなければ、進路学習の効果はあるはずです」

また、教員同士の横のつながりをもつために、椿先生は「フライデーズカフェ」というサロンを開催している。エコ、科学、保健などをテーマに、教員同士がお茶を飲みながら話し合うカジュアルなもので、仕事の愚痴を言わないのがルール。毎回20人程度の参加者がある。

さて、年度が終わると、進路指導部は総括として冊子を発行する(08年度は表紙+7ページのも

図2 自律型探求力の育成

進路にまつわる新聞・雑誌等の記事の切抜きを、教室周辺の廊下に展示。

1年の調べ学習「人物調査」。生徒が優秀作品を選び教室前の廊下に張り出す。

「人物調査」のワークシート。"書かせる"ことに重点を置いた進路学習を心がけている。

の)。内容は進路状況分析、3学年総括、1・2学年総括、進路学習のコンセプト確認などである。3学年総括では、各担任に「進路希望調査の実施」「情報の共有化」などが適切であったかどうかフリーアンサーのアンケートを実施し、担任からの回答をすべて掲載。そして、苦情や疑問、提案などについて、一つひとつ進路指導部からの回答をつける。個々の取り組みについての振り返りと、1年の総括としての振り返り。両方を大切にすることで、何年も継続していける進路学習を目指しているのである。

Close up ② 生活の中の進路

学習やコミュニケーションが主体的な進路選択につながる

椿先生が、一部の生徒を対象に新しく取り組んでいるのは学習指導。1日や1週間のスケジュールを提出してもらい、家庭学習の時間の取り方などについてアドバイスをするもので、今後発展させていきたいという。「進路というのは生活の延長線上にあるもの。決まった時間に起床・就寝・学習をして、教員や保護者、友達と進路の話をして……ということを自然にやっている生徒は、進路もきちんと決まっていっていますから」と椿先生。「キャリア教育とは、ある意味では生活指導なんです」

1学年の冬期休暇の課題「わくわくインタビュー」は、身近な人から仕事のことなどについて学ぶものだが、インタビュー先に想定しているのは保護者。進路について家庭で話し合うきっかけになってほしいとの思いがある。

また、現在、看護系の進学志望者でのグループワークを実施。受験前の約2カ月、新聞の切抜きなどをもとに約40回のディスカッションをさせる。これはグループ面接対策であると同時に、同じ夢を目指す者同士のコミュニケーションの場にもなる。「将来について語り合える仲間がいることは、主体的な進路選択につながる」という考えから、このグループワークについても今後発展させていきたいそうだ。

生活の中の進路という言葉どおり、同校ではハード面でも"進路"が学校の中に溶け込んでいる印象がある。3学年の教室近くに進路指導部があり、窓はオープン。進学案内等の資料類は各学年の廊下に適宜置かれ、生徒が抵抗なく手に取れるようになっている。さらに、生徒たちの進路学習のワークシートとともに、職業人インタビューなどの新聞・雑誌記事も廊下に掲示されている。

●

「進路学習、進路指導は楽しくやる」…椿先生がモットーとしていることだ。「進路とは本来夢のあるもの。それが苦しくてつらいものになってはいけない」と考えている。一方、保護者以外の社会人へのインタビューや、少人数での社会人講話、進路別グループワーク、個別学習指導、保護者への情報発信など、まだ一部でしか取り入れられていない取り組みも多い。教員も生徒も負担にならない方法で、進路学習をいかに充実させ継続していくかがこれからの課題のひとつである。

INTERVIEW

松戸高校の進路学習について

■印象に残っているのは宇宙飛行士の方へのインタビュー。目がキラキラしてすごいオーラが出ていて感動しました。宇宙飛行士に認定されるまでの過程で、苦しいことも多かったでしょうけど、楽しそうにお話しされる前向きな姿勢がすごいなと思いました。私は将来、声優を目指しています。厳しい道なのはわかったうえで、専門学校でみっちり勉強して必要とされる人になりたいです。(写真左から 3年 清水香織さん)

■中学校の国語の先生になることが夢です。先生に相談したら、教育系の学部じゃなくても資格がとれるということを聞き、「職業調査」などの時間を使って自分でもいろいろ調べてみました。結局、多くの選択肢があって今すごく悩んでいます。でも、自分のことだから、ギリギリまで精いっぱい考えたいです。(3年 菅家瑠菜さん)

■看護師になりたかったんですが、一日体験に参加して違うなと思いました。今は教師を目指しています。それを進路や担任の先生に相談したら、実際に聞くのがいちばんと言われたので、小学校や中学校の先生に聞きにいきました。実際の話を聞けたのはすごくよかったです。(3年 大塚 優さん)

■生物と歴史が好きで、将来もずっと関わっていきたいです。調査することが好きなので、「人物調査」などの調べ学習は本当に楽しくやれました。課題が出た次の日に始めて、ワークシートの裏まで書いたくらいですから。こういう作業をいくつかやりながら、自分の好きなこと、苦手なことに気づいた部分もあります。(3年 高橋沙帆さん)